6 月第 4 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 6 月 23 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 6 主日礼拝
■説　教：　保科けい子牧師
■聖　書：新約：ヨハネによる福音書 4 章 27 節～42 節（新約 p170）
■説教題：「　言葉を聞いて信じる　」
■讃美歌：58「み言葉をください、」
　　472「朝ごとに主は　目を覚まさせ、」

本日の箇所の話は、4章の1節から始まります。サマリアのシカルという町の「ヤコブの井戸」のところで、主イエスが一人のサマリアの女性と出会った、という内容です。正午頃に水を汲みに来たこの女性は、普通は誰も来ない暑い真昼に水を汲みに来たのですから、人目を避けて生きていただろうし、周囲の人々からも軽蔑され、仲間はずれにされていたのです。具体的には、4章16節から18節までにその内容が記されています。しかし、主イエスとの出会いによって、正確には主イエスが語りかけて下さったことによって、彼女は変えられました。町の人たちの目を避け誰にも会いたくないと思って生きていた彼女が、積極的に人々に語りかけ、主イエスのことを証しするようになったのです。そのことが、本日の箇所に記されています。28～29節にこう語られています。「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。『さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、いい当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません』」。この女性の言葉を聞いて、30節にあるように、「人々は町を出て、イエスのもとへやって来た」のです。何気なく書かれているので読み過ごしてしまうところですが、シカルというサマリアの町は、町の中心部にいる人々と町の周辺部にいる人々が区別されていたのかもしれません。なぜなら、28節で「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。」と描写されていて、女が「町に帰って、人々に言った」と記されていないのは、女が町の中心部にいる存在ではなかったということかもしれないと思われるからです。

ところで、本日は 31 節から 38 節に記されている主イエスと弟子たちの会話は取り上げずに、サマリアの女とサマリアの町の人々の話が記されている 39 節へ移ります。39 節には「さて、その町の多くのサマリア人は、『この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました』と証言した女の言葉によって、イエスを信じた」とあります。「その町の多くのサマリア人」と言われているのは、30 節で彼女の言葉を聞いて町を出てイエスのもとにやって来た人々のことです。それらの人々は、この女性の「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」という証言によって、主イエスを信じたのです。
「証言する、証しする、証言、証し」はヨハネによる福音書におけるキーワード一つであって、名詞でも動詞でもしばしば出てきます。39節にもそれが出て来ています。自分が確かに見たことや体験して知っていることを「こうでした」と証言する、それが「証し」です。「証し」という言葉は、この福音書のしめくくりにあたる21章の24節にもあります。「これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている」と記されています。「これらのこと」

とは、この福音書において著者が語ってきた主イエス・キリストのみ言葉とみ業の全てです。それらについての証しとしてこの福音書は書かれたのです。その目的は、この福音書を読んだ人が、そこに書かれている主イエスによる救いが真実であることを知って、主イエスを信じるようになることです。そのことが4章39節においても起っているのです。この福音書全体が目指していることを先取りするように、一人の女性が主イエスについて証言をし、それを聞いた人々がイエスを信じたのです。けれども私たちは、この女性のこの証言だけでどうして彼らは主イエスを信じたのだろうかと不思議に思います。ここで起っているのは、この女性が全く新しい存在へと変えられたという不思議な出来事です。自分をさげすみ人々からも蔑まれて、人目を避けるようにして生きていた彼女が、人々が大勢いる町へ行って自分の方から彼らに語りかけ、「さあ、私と一緒にあの人のところに行きましょう。きっとあの人こそ私たちの救い主メシアかもしれません」と語り出したのです。おそらく彼女自身も、自分がそんなことをしていることに誰よりも驚いていたでしょう。主イエス・キリストとの出会いは、言い換えればキリストによる救いは、私たちにこのような変化と新しさをもたらすのです。その新しさとは、自分がこれまで背負い抱えていた罪とそれによる苦しみから解放されることによるものです。「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」という言葉がそのことを示しています。主イエスは、彼女の過去の行いを、そこで犯してきた罪を、人を傷つけ自分も傷ついてきた苦い経験の全てをご存知であり、それを明らかになさったのです。しかし、それは彼女を断罪し裁くためではありませんでした。彼女の罪の全てを主イエスはご自分の身に背負って下さり、それによって彼女をその重荷から解き放ち、罪赦された者として新しく生かして下さったのです。だからこそ、彼女はそれまで避けていた人々の前に自分を晒すことができたのでしょう。

彼女自身も驚いているその新しさは、周囲の人々をも驚かせます。人々は、いったい彼女に何が起ったのかと不思議に思ったのです。人々が町を出てイエスのもとにやって来たのはその驚きのためだし、彼らが「証言した女の言葉によって、イエスを信じた」と語られているのは、彼女がこのように劇的に変ったのは、イエスという人と出会ったことによってであることが分かったということでしょう。そのような変化を見聞きして人々は驚き、そこに何があったのかを確かめようとしたのです。私たちもまた、そのような出来事に出会って、主イエス・キリストに出会った者の一人ではないでしょうか。だからこそ、私たちもまた、主イエスによる救いを証ししつつ生きる者となるのです。その結果、私たちの証しによって人々が主イエスを信じるようになる、ということが起っていくのではないでしょうか。

40節には、彼女の証しを聞いて主イエスのもとに来たサマリア人たちが「自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。」と記されています。あの女性が別人のように変わったのを見て驚いた人々は、その変化をもたらした主イエスに、自分たちのところにとどまるように頼み、主イエスはその求めに応じてそこに滞在なさったのです。「とどまる」と「滞在する」は、元の言葉では同じものが用いられています。そして、この言葉もヨハネによる福音書において大変重要なキーワードなのです。その言葉は既に１章の38節、39節に「泊まっておられる」という言葉で出て来ています。そして、この「とどまる、滞在する」という言葉は、ヨハネによる福音書の15章1節において、主イエスがお語りになった有名な「わたしはまことのぶどうの木」で始まるみ言葉とも深く関係があ

るのです。15章4節から5節に「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」とあります。ここに何度も出てくる「つながっている」が、「泊まる」、「とどまる」、「滞在する」と同じ言葉なのです。ヨハネによる福音書はこの言葉によって、主イエスが私たちのところに留まり共にいて下さることを明らかにすると同時に、主イエスを信じる私たちも主イエスにつながっており、主イエスのもとにとどまっているということを見つめようとしているのです。

サマリアの人々の願いに応えて「イエスは、二日間そこに滞在され」ました。それは、主イエスが彼らと共にいて下さり、彼らも主イエスにつながっている、という深い交わりがそこで与えられたということです。その結果が41節です。「そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた」とあります。主イエスが共にいて下さり、自分も主イエスにつながっている、という交わりの中で、主イエスのみ言葉を聞く体験が与えられ、そこに、主イエスを信じる者たちが興されていくのです。ここには、私たち自身の信仰がどのように芽生え、成長していくのかが語られています。私たちの信仰は、他の人の証しを聞くことから始まります。主イエスのことを証ししてくれる人なしには、私たちは主イエスを知ることができないし、信仰へと至ることはできません。しかし、信仰が成長する過程において、4 章42節の「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない」という言葉は重要な意味を持っています。主イエスによって変えられた人の姿やその証し話に、私たちが感動することは信仰のスタートとなるかもしれません。しかし、それはまだ自分自身の信仰ではありません。証しを聞いた者は、それに促されて主イエスのもとにやって来るのです。それが礼拝です。そこで、主イエスのみ言葉を自分自身が聞くという経験を与えられます。そこに、「自分で聞いて信じる」という出来事が起こってくるのです。